

校長室だより

日本福祉大学附属高校 2019年3月1日

万人の福祉のために

真実と慈愛と献身を



卒業証書授与式と卒業生を送る会を開催しました

2月26日(火)第59回卒業式が美浜町長・教育長始め美浜・南知多・武豊各中学の校長先生や理事長、学園長、学長など学園関係者、同窓会長、後援会長などのご出席をいただき挙行されました。一部(卒業証書授与式)は卒業証書授与・校長式辞・来賓祝辞などに続き、卒業生代表2名が決意の言葉を述べました。第二部(卒業生を送る会)は、思い出の動画や2年生による歌や寸劇、教員合唱と教員代表の言葉、そして卒業生による発表が合唱を交えて感動的に行われました。大勢の保護者の皆様のご出席をいただきましてありがとうございました。



(校長式辞より) 抜粋

ご卒業おめでとうございます。3年前の皆さんはまだ幼さが残っていましたが、今は、心も身体も一段とたくましくなった立派な青年として私の目に映ります。皆さんの成長とともに、学校もその歴史を刻んでまいりました。本校は昨年創立60周年を迎えましたが、記念式典や様々な事業を無事執り行うことができました。それだけでなく、この間、卒業生の皆さんの頑張りによって学校全体を大きく前進させることができました。

第一は部活動の飛躍です。和太鼓部は昨年度全国大会最優秀賞を獲得し、国立劇場での演奏や、昨年末は京都で行われた伝統文化フェスティバルに、全国の高校生の和太鼓の代表として演奏しました。今年の全国大会の出場も決まっています。サッカー部は県の選手権でベスト8に進出し、今年は県2部リーグに昇格することになりました。野球部は夏の東愛知大会でベスト8に進出しました。他の運動部や文化部も含め部活動が活発になり、生徒諸君の活躍する姿をいろいろなところで見ることができました。

第二はフィリピンの姉妹校との交流の活発化や、英語とICTを活用して諸外国の高校生や大学生と交流するワールドユースミーティングのプレゼンテーションの深化です。1年生の夏、数人の生徒が初めてフィリピンを訪問し、英語学習やマングローブの植樹などの環境保全活動に参加しましたが、そのとりくみが元になり姉妹校提携にこぎつけることができました。それ以来、双方の交流が年々活発になり、生徒間の交流だけでなく、教員が入れ替わり双方の学校で授業を行う相互研修に発展しています。今では本校のESD活動(持続可能な開発のための教育)の大切な柱となっています。

第三は生徒会活動の活発化が挙げられます。1年生当時の学級で、文化祭をはさんととりくんだ「被災地に笑顔届けようアンパンマンプロジェクト」が、ボランティア専門部県大会で最優秀賞を獲得し、全国高等学校総合文化祭宮城大会でも発表を行いました。それがきっかけで熊本地震の募金活動が始まり、毎月生徒会執行部を中心にとりくまれ、現在でも引き継がれ、持続的なとりくみとなっています。

昨年の文化祭では生徒会企画として、福島の高校生を招き交流を行いました。ここには福島の高校生を励ますことと、東日本大震災のことを忘れないでほしいという生徒諸君の思いが伝わりました。

また昨年の夏には本校が舞台となった映画「世界でいちばん長い写真」が公開されました。その前年、本校でロケが行われましたが、猛暑の中、先輩達と一緒に映画製作のために協力してくれたのは、君たち3年生でした。人数の少ない学年にもかかわらず、皆さんはこのように様々なとりくみを通じて、本当によく頑張ってくれ、その成果を1、2年生に引き継いでくれました。皆さんの努力を讃えたいと思います。



卒業文集「感謝」完成

教職員と卒業生全員の言葉や幼い頃の写真、部活動代表者の感想、保護者の言葉など見どころ(読みどころ?)満載です。卒業後もこれを読んで高校時代を思い出してくれるとうれしいです。文集委員さんご苦労様でした。



卒業生代表の言葉 (一部略)

○私の三年間は部活動に明け暮れた日々でした。日本福祉大学付属高校野球部で、たくさんの経験をするなかで、入学時には想像もできないほど成長することができました。

1年生の時、1年生でありながら出してもらった試合。緊張と不安から思うようなプレーができず、勝利にはほど遠いものでした。勝てなかったことで、先輩達に対して申し訳ない思いでいっぱいでした。

2年生の秋、私たちの代になって最初に決意したこと。グラウンドで一緒に校歌をうたうことができなかつた先輩達に、来年はスタンドからであっても一緒に校歌を歌いたい、先輩達に校歌を歌ってもらいたい。そのためにはまずは一勝、これをチームの目標にしました。私はキャプテンを引き受けることになって、まず部員の見本でなければならぬと決意しました。そして、ミスをして後ろ向きにならず、次につなげるために声を出すことを心がけました。冬、地道な基礎トレーニングを続けている時期、部員全体の気持ちを一つにすることの難しさを痛感しました。一方的に自分の思いを言うのではなく、話し合いをしたり、相手の思いをだまってい聞き取ることの大切さを学びました。同時に私を支えてくれた仲間達がありました。彼らとの友情はこの先の財産だと強く思います。

3年生になって、新入部員をむかえ、野球部は60人弱の大きな部活動となりました。人数が増えたことで、部活動にも勢いができました。ベンチに入ることのできない部員達が声を振り絞って一生懸命応援をしてくれる。試合にでるメンバーのサポートに回ってくれる。こんなありがたい先輩達のためにも、3年生はより一層がんばらなければならないと思いました。

今年の夏、東愛知大会でベスト8という結果を残すことができました。この結果も突然のものではなく、昨年秋から一つずつ結果を積み上げてきたからのことだと思います。指導をしてくださった監督、サポートしてくれた先輩達、そして心から応援してくれた家族に、感謝の思いをこの場で伝えたいと思います。ありがとうございました。

この三年間を通して、私が出たもの。一つ目は、目標を設定すること。そして、その目標が達成できたら、次の目標をすぐにつたてていくことの大切さです。二つ目は、目標を達成するために十分な努力をすること。努力をすれば報われます。そして三つ目は、自分たちを支えてくれる人たちの力のありがたさです。声を枯らしての応援に、どれだけ力をもらったかわかりません。

私は将来教師になりたいと考えています。私が高校時代育ててもらったように、今度は私が生徒を育てる立場になりたい。その時に、この高校時代の経験は、私に指針を与えてくれるものになるでしょう。そこをめざし、今後も十分な努力を続けていきます。

(R.O)

○私の高校生活は、さまざまなことに積極的にとりくんできた三年間でした。私を大きくかえるきっかけになったのは、1年生でとりくんだ、文化祭クラス企画、アンパンマンプロジェクトです。この取り組みは、熊本地震の被災地にある子育て支援センターへ、おもちゃや支援メッセージ、支援センター等で使ってもらうための壁飾りを作成し、募金とともに送るという取り組みでした。この取り組みをしていくなかで、地域のNPOと協力したり、大学生と一緒に取り組んだり、子育て支援イベントや保育所等でのボランティア活動をしました。このとりくみをまとめ、高文連ボランティア専門部の県大会で発表、最優秀賞に選ばれ、翌年の全国高等学校総合文化祭への出場が決まりました。自分の思いが相手に伝わり、認められたことは、私にとっても大きな自信となりました。2年生の夏、仙台での大会で、全国の高校生を前に発表、その思いが共有されたことは、さらなる自信となりました。この取り組みを通じて、生徒会執行部としても活動をするようになりました。一つのクラスだけの取り組みではなく、継続的な被災地支援の取り組みにしていきたいという思いがあったからです。実際に月一回の募金活動をはじめ、その募金は同じ子育て支援センターにお送りしました。確実に誰かに届けたいと考えたからでした。

このような活動の出発点は、なんとかしたい、なにかできないかという個人の思いでした。でも一人ではなにもできない。まずはクラス議長団で話し合い、クラス全体の思いとしていきました。生徒会としても私個人の思いを執行部全体につたえ、それを共有してもらいながら形にしていきました。出発点は個人の思いであっても、それをどのように共有するか、そして地域の力も借りながら、高校生でもできるボランティアを、自分のいる地域で考えることの大切さを学びました。

おぼろげながら「子どもに関わる仕事がしたい」と思っていた私は、アンパンマンプロジェクトや熊本募金をしているなかで、「これが私のしたいことにつながっている」と考えるようになりました。困難な状況に置かれている子ども達に寄り添い、彼らの声に耳を傾け、その困難を取り除くために、どんな制度やしくみが必要であるか、仕事として整えてあげたいと考えるようになりました。力になってくれる存在は傍にいと伝えたいと思うようになりました。その思いを言葉で伝えたい、言葉で伝えることでパワーを与えたい。そんな存在になりたいと思うようになりました。

そこで選んだ福祉の道に、私はすすみます。大学生になることで、高校生ではできなかったことができるようになります。実際に現地に行くこともできます。直接声を聞くことも可能になります。その時に適切な取り組みができるように、知識を蓄えながら、専門家集団として動くことができるように、自分を高めていきたいと考えています。(R.I)